
新年拝：イディンにて

平 啓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新年拝：イディンにて

【Nコード】

N6755X

【作者名】

平 啓

【あらすじ】

架空世界イディンでの物語

長編の本編「ラストバン王の給仕」の番外編。ラストバン王国第二王女エリダナ・チェローミア姫を巡るイディンの四季。

●番外編1「エリダナ・チェローミア姫の陰謀」

長い長い名前に悩む姫が、日ごろ恨み重なる給仕長を謀殺せんと画策。さて、その顛末は？

ハロウィンがない世界で、「カボチャ、『悪戯かお菓子』、狼男」

での三題噺。

- 番外編2「ヤマネの夢」

イデインの年の瀬。王宮裏の林で姫が拾ったのは果たして何か？

歳末助け合いの話。

- 番外編3「新年拝」

イデインでも歳替わりは重要な節目。欠く事の出来ない行事「新年拝」に思わぬ障害が。

年初め、来福のおめでたい話。

(初出：2010/10 GREENサイト内コミュ電メ名義より転載・
2011/10 エブリスタ・ヒラク名同)

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？（前書き）

> i 3 3 1 1 8 — 2 5 1 7 <

ラストバン王国第二王女、7歳にして給仕長謀殺を画策す

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？

エリダナ・チェローミア・マナ・フロザリン・アビガイーヌ・ヴィア・克蘭ジット・サス・ラストバン

そこまで書き上げた姫は、大きく息をついて顔を上げた。まったくどうして、自分の名はこんなに長たらしいのだろう。けれど、とうとうやり遂げたのだ。姫の顔は、満足に光り輝いた。

以前、外の者の名が一つしかないと聞いて羨ましがったら、とてもないと養育係のシャーリンが怒った。どれもこれも克蘭ジット家の由緒ある名前ですと、すごい鼻息でまくし立てられる。けれどシャーリンは三つしか名前がないから、それがどんなに迷惑か分からないのだ。

——もつと短かったら、タニヤザールにあんなコト言わせないのに！！

彼の仕打ちを思い出し、姫のはらわたは煮えくり返った。あの男は、たかが家来の分際で、王女に対して頭ごなしに命令し、非礼極まる言葉を遠慮も無く投げかける。

先日などは綴り方の時間に急に姿を現し、それまで必死に書いていた答案用紙を覗き込み、ぷつと小さく笑ったものだ。

「姫君は、おいくつになられたのですか？ まだご自分のお名前が、満足に書けないとは……」

それを聞いた若い女教師の顔に苦笑が浮かび、あまりの屈辱に目がクラクラした。授業が終わるや否や、一仕事終えのんびり寛いでいる父王の所へ飛んで行った。

「お父様！ あの男を死刑にしてください！」

「あの男？」

「タニヤザールです！ あの無礼者の給仕長です！」

姫の剣幕に押され、眉を寄せた王はもごもご口を動かした。

「ああ、彼がいないと私が困るが……一体何があったのだ？」

そこで、一国の王女がいかに辱めを受けたかの一部始終を訴えると、父はいきなり怖い顔をして叱ったのである。

「お前はまだ名前も書けないのか！」

——お父様はダメだわ！

姫は王の無能を断じた。あんな男を頼っていてラストバンはどうなるのかと、この国の行く末を案じ、やはり将来自分が女王になるしかない、決意を新たにする。

だが、さしあたっては、あの給仕長タニヤザールに一矢報いなければ気が済まない。姫の頭の中では、彼はすでに百回も死刑になっているほどののだ。即位の暁に実行すべく『しけいちょう』には、いの一に彼の名前が書かれている。

おまけに他の家来ときたら、タニヤザールには唯々諾々と従うくせに、王女である自分が命令しても、微苦笑を浮かべて、ちっとも言うことをきかないのだ。あのヴァーリックでさえ、給仕長のご命令ですからと、頑として動かない時がある。ここいらで、本当はどちらが偉いのか示しをつけなくてはならない。

かくて、エリダナ・チェローミア姫は、秘密計画を実行に移した。

父王レナルスード四世は、朝の九刻から執務室に籠もって仕事をする。公文書室の室長の持つてくる山のような書類に、ひたすら国王の玉璽を捺すのだ。時折、書類の文字を追うこともあるが、思いは殆ど昼食の献立に奪われているようである。

半月ほど前、仕事を終えた王の退出後、執務室にこっそり入り込んだ。姫にとってこの部屋は奥深い山の中で、大きな執務机の下は義賊の隠れ家なのである。玩具の剣を腰に、横暴極まりない王の圧政に怒りを覚えつつ潜り込むと、奥の方に何やら白い紙が落ちてい

た。拾い上げて書かれている文字に目を通す。が、さっぱり分らない。その内執務室に入って来た者達がいて、慌てて部屋のあちこちを探り出した。

「馬鹿者！一枚足りない又何故気づかない！」

苛立つた叱責に、若い情けない声が応える。

「申し訳ありません。ちゃんと確認したつもりなのですが……」

「お前は、いつも『つもり』ばかりでないか！死刑執行書は再発行が面倒なのだぞ！見つからなかったら、こちらで始末書を書かねばならん」

——死刑シッコーショ！

その言葉に姫は手元の紙に目を見張り、急いでエプロンの胸当ての中に押し込んだ。すぐに衣擦れが近づく気配がして、黒い影が机の下を覗き込む。

「悪の手先め！」

姫は叫び飛び出すなり、突き出された光る頭を玩具の剣で一撃した。警護隊長直伝の一刀は見事にきまり、公文書室長が目回してひっくり返る。

「ああ！室長殿！」

若い職員の悲鳴を背に、姫は執務室を飛び出した。

自室に駆け込み、寝室の窓辺のカーテンの陰に隠れる。高鳴る胸を押さえつつ、拾った紙を広げた。シッコーショの何たるかは分からないが、死刑に関するホンモノの書類らしい。もしかしたら、ここに名を書かれた人物は、王の印が捺されれば、死刑になるかもしれない。そんな姫の予想は、警護隊長のヴァーリックに『執行書』なる言葉の意味を訊いて、確定的になった。

それでは同じ書類を作り、タニヤザールの名を書けば、あの無礼な給仕長は死刑になるのだ。三日かかって出た結論に、姫は舞い上がった。父王はどうせ上の空で、印を捺すに決まっている。なんと素晴らしい思い付きだろう。

ただ問題があった。書類の文章の、どの部分が死刑囚の名か、ま

まったく分からない。分からない単語は辞書で調べましようとの教師の言葉を思い出し、四苦八苦して辞書を開いた。ところが、一つの単語を引くのに恐ろしく時間がかかる上、説明されている文が、これまた全然分からない。

姫の計画は頓挫しかかった。

しかし、思わぬ情報が耳に入る。

斥候ごっこをして柱の陰に潜んでいると、廊下の向こうからヴァーリックがやって来た。日ごろ大好きな隻眼の顔も、この時は油断ならない敵兵と身構える。そこへ、副隊長が彼を呼び止め、先日死刑が決まった事件が、実は冤罪だったそうですねと声をかけた。死刑執行書の発行が遅れているうちに、真犯人が捕まったらしい。ヴァーリックは強面をしかめて憤慨した。

「まったく我が国の警察は何をしているのか！」

「まあ、検察のメンツは潰れましたが――」

その死刑囚某は命拾いしましたなどと、呑気に笑った副隊長から囚人の名が語られる。

エンザイは何だか分からないが、シッコーショが遅れたとは、先の書類に違いない。つまり死刑囚某は、書類に書かれた名前なのだ。綴りはよく分からないにせよ、似たような言葉を捜せば見つかるかもしれないと、急いで部屋へ戻った。書類に目を走らせ、一番下、行を新たに書かれた単語に見当をつける。横にヴァルドとあるので（これは何とか読めた）、名前がこれ一つだけと言うのも確実だ。この死刑囚の名の代わりに、タニヤザールの名を入れてしまえば、完璧な死刑執行書が完成する。

姫の計画は大きく前進した。

文箱をひっくり返して、書類の紙と似た白紙を探す。使用済みの反故紙でも貴重であると分かっているが、真っ赤な添削の入った綴り方の答案用紙が、次から次へと出てくるのには腹が立った。復習

するようにと教師が渡したものを、召使が几帳面に入れておくらしい。姫としては二度と見たくない代物である。

幸いこの春、チエルキスの伯母から贈られた真新しい紙があった。綴り方の練習をせよと渡した紙が、まさか死刑執行書に使われるとは、さすがの伯母も思ってたなかつただろう。だが紙面は、姫がこれまで書いた事もない単語で埋め尽くされ、確かに綴り方の練習にはなった。もちろん意味は分からなかったが、間違ひなく写すべく、生まれて初めて書き取りに神経を集中したのである。

作業は秘密を守るため、就寝時間に行われた。夜間用のカーテンと窓の間には、柱の奥行き分の空間が空いており、そこに秘密の作業場所が設けられた。小さい机替わりの台を引き入れ、ランプを置いて、夜な夜な書き写し作業に没頭する。気を付けているのにも拘らず、あちこち間違えて、紙はどんどん少なくなっていく。おまけに連日寝不足に陥るが、こちらはその分昼寝で補い、姫の昼寝時間が最近長いとシャーリンは喜んだ。

やがて苦勞の甲斐あって、満足のいく死刑執行書が完成した。ところどころインクの染みが出来てしまったが仕方ない。もう紙もない。最後の行替えに、タニヤザールの名を書く。

—— たった、三つしか名前がないくせに！ たかが侯爵のくせに！
姫は恨みをこめて一文字一文字を綴った。

被執行人の欄は完成した。問題は、更にその右下の欄だ。執行申請者。これまた意味が分からなかったので、ヴァーリックに訊いて確認した。ここには自分の名前を書かねばならない。この時のために、姫は懸命に自分の名の綴りを練習した。間違えてはならない。この執行書が、まさしく王女による自分の名によって申請されたものと、明らかにするためには。

そして、姫は書き上げたのである。長い長い自分の名を。ここに父王の印が押されれば、間違ひなくタニヤザールは死刑である。

達成感に満ちた笑みを浮かべた姫は、ふと首を傾げた。我が国の

死刑とは、どうやって為されるのだろうか。怖い昔話の首切りや首括り、磔などの言葉が思い浮かんだが、実際に想像すると、えらく気持ち悪かった。エルシャロンの騒動で怪我人をちらりと見た時など、血にまみれた姿が、痛そうで可哀そうで胸がどきどきした。

しばらく考えて頷く。

——タニヤザールが、ごめんなさいと謝ったらゆるしてあげよう。

明日はこの計画の仕上げをするが、今までの骨折りからすれば何の造作もない。

難行成就の余韻に浸りながらランプの灯を消し、窓の外へ目を移した時だった。星空を切り取った山陰の中に、小さな光がちらちらと瞬いている。方向からして果樹園に隣接した力ボチャ畑で、確か農具置き場の小屋があったはずだ。

そういえば、と思い当たることがあった。秘密の作業を開始してこの一週間ほどの間に、二回ほど同じような瞬きを見たのだ。その時は執行書を書き写すのに頭が一杯で、気にする余裕もなかったのだが、こうも続くとは、さすがにおかしい。好奇心がむくむくと湧き上がる。明日の午後の行き先は決まったと、姫は台の上を片付けた。

エリダナ・チェローミア姫の毎日は、かくも忙しいのである。

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？（後書き）

< 語句説明 >

● 外の者

国や領主の支配を受けてない民・ヴァルド（森の民）、シーリア（海の民）、ローティ（路上の民）がいる

● イディン

この架空世界。獣人・竜がいる。

● ラスタバン王国

イディンの中でも、裕福な大国。首都ティムリア。

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？（前書き）

<登場人物1>

●エリダナ・チェローミア姫

ラストバン王国第二王女 七歳

>i33274—2517<

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？

翌朝、あまりの喜びで寝付けなかったせいか、朝食の席で大きく舟を漕ぎ、料理に少し手を付けただけで、時間が無くなってしまった。もう、いらないと言って家族を驚かせ、急いで席を立った。計画の仕上げ時が、迫っていたからである。

自室から執行書を手に廊下を疾走するが、いつものことなので、誰も気に止めることはない。公文書室前まで来ると、丁度室長と室員が書類の入った文箱を持ち、部屋を出た所だった。歩調を合わせ、一列に王の執務室へ向かう。

「てきしゅううう！」

飛び出した姫は、叫びながら彼らの足元をつむじ風のようにくるくる回った。慌てて足をもつれさせた室長の背に、後ろの室員がどんとばかりぶつかる。手から放たれる文箱。その拍子に蓋がぱっくり開いて、中の書類が景気よく宙に舞い散った。

「あああああ！！」

室長を押しつぶして倒れた室員が悲鳴を上げる。その隙に姫は散らばった書類の間に執行書を紛れこませ、脱兎のごとく駆け去った。廊下の端で様子を窺うと、起き上がった二人があたふたと書類を拾い上げ、文箱に収めている。やがて、拾い忘れがないか見回した彼らは、先程のように列になって廊下を進んで行った。

為すべきことは、全て終わった。

しかし、ゆっくり喜んでいる暇はない。間もなく授業が始まる時刻である。多少の遅刻で怒るような教師ではないが、授業時間に廊下にいる所をタニヤザールにでも見つかったら面倒だ。他の余計な面々とも顔を合わせないよう、近道をとる事にした。

ティムリアの王宮は城塞の例に漏れず、あちこちに秘密の通路があり、長い歴史の間に忘れ去られた抜け道も少なくない。姫の飽く

なき探求心は、その幾つかを突き止め、父王の執務室に忍び込めたのも、成果の一つである。

最近見つけた学習室への抜け道は、公文書室に近い階段の踊場の陰にある。あまり使われてない場所なので、人影を認めた時には驚いた。急いで備えつけの花台の陰に隠れたが、これがただの人影ではない。

なんと、接吻中の男女である。姫の目は皿のようになった。こちらに背を向けている警護隊の制服に、一瞬ヴァーリツクだと思ったら茶髪の副隊長だ。相手は、と思って目を凝らした時、頬を赤くした女教師が脇をすり抜けて、階段を上って行く。振り返った副隊長が、警護隊一男前という顔を締めりなくニヤつかせたので、姫は無性に腹が立った。将来、死刑とは言わないが、鞭打ちぐらいは与えた方が良くもしいない。だが、今はそんな事に気を取られていない。

——早く、退きなさい！

甘い余情にのんびり浸かっている色男に、呪わんばかりの念を送ると、ようやく踊るような足取りで、その場を立ち去った。

学習室の造り付けの戸棚から飛び出し、机に向かった途端扉が開いて、にこやかな女教師が入って来る。息を整えながら姫は素知らぬ顔で、おはようございます、先生、と挨拶した。

この日も綴り方の練習があつた。最近多いなと思いつつ、もう自分の名前は淀みなく書けるので、姫は軽々とペンを走らせた。あら、と教師が小さく呟くのを聞き、鼻から得意の息が漏れる。

しかし、膨らんだ自信もそこまでだった。教師の口から次から次へと出てくる単語が頭をぐるぐる回り出し、果ては答案の文字も踊り始めたのだ。しかも朝食を殆ど食べなかったせいも無性に空腹を覚え、特にお菓子への欲求がしつこく離れなかった。

苦勞した答案用紙が、教師の添削で真っ赤になる。午後にもおさらいをしてくださいね、と女教師はいつもの言葉を掛けながら、優しく微笑んだ。この甘さに全面的に寄りかかっている姫も、この

教師は怒る事があるのかと思う時がある。だが、年中養育係のシャーリンやタニヤザールにお小言を貰っているのも、これ以上何か言われてもたまらないと、余計な心配をすることは止めた。

この日は続いて算数と読書だった。算数は割と得意な上、本も好きな物を読んで良かったので、後の時間はまずまず楽に過ごせた。これもいつもの通り早めに授業は終わり、挨拶の後、片付けた机の上の答案や文具を、召使がまとめて姫の部屋へと持って行く。どうせ、おさらいなどしないから、真つ赤な答案は捨てるように、後で言おうと思いつながら学習室を出た。

昼食までの時間は兵隊の訓練の様子を見て潰そうと、例によつて駆け出そうとしたら、足に力が入らない。お腹が空き過ぎたためと分かつて、行き先を食事室に変更した。ふらふらと歩を運んでいる姿が家来たちの目を引いたようで、御加減が悪いのですか、と心配そうに訊いて来る者が何人もいる。なんでもありませんと勢一杯王女らしい笑顔を向け、やっと食事室の椅子に座ってへたり込んだ。この日、誰よりも先に席に付いている姫を見て、シャーリンが目を丸くしたのは言うまでもない。

物凄い食欲を見せて周囲の注視の中、デザートのかぼちゃプリンを一口した所で、姫はテーブルに突つ伏した。姉姫の悲鳴にヴァーリックが駆けつけ、伏せられた顔を覗くと、気持ちよさそうな寝息が立っている。養育係と顔を見合わせた警護隊長は、小さな体を抱き上げ、ぶつくりした頬の食べかすを拭き取って、姫を寝台へと運んで行った。

死刑台で命乞いをするタニヤザールに、尊大な笑顔で許してしんぜようと言った所で、エリダナ姫は目が覚めた。

いい気分のぼんやりした目で部屋を見回し、カーテンの引かれた窓際に、背の高い影を見つけて驚いた。間違えるはずの無いその形から、聞き慣れた声が掛けられる。

「おや、御目覚めですか？」

「何をしているのです」

当たり前なその様子に憚然と返した所で、タニヤザールがカーテンを開けた。急に射し込む陽に目が眩む。間もなく慣れた目が給仕長の手にしている物を認め、喉奥がきゅっと締まった。文箱から取り出した、朱入り添削済み答案の束である。

「まことに、凄い成果の積み重ねでいらっしゃる」パラパラと目を通し、一番上の紙を掲げる。「これは今日の答案ですか？ お名前が間違いなく書かれています」

「お前が馬鹿にしたので練習したのです。もう、一綴りだって間違えません」

「それは良い努力をなさいました」

勢一杯見返してやろうと顎を反らせたが、なんだか向こうの方が偉そうなので、褒められてもちつとも嬉しくない。では、とさつさと退出しようとする背がまた気に障った。

「タニヤザール！ 無断で部屋に入り、王女の持ち物を勝手に開けるとは無礼であろう！」

足を止めて、こちらを振り返った顔がにやりと笑う。

「大口開けて涎をこいているお方に、無くして困る礼など無いと思われましたので」

その言い様に更にむかつ腹が立ち、姫は思い切り険悪な眼差しで睨み据えた。

「寝ている時の顔なんて知りません！」

すると小首を傾げた後、左様でございますなど、あっさり頷く。

「これは、まことに失礼をいたしました。お許しください、姫君」黒い礼装の丈高い姿がすらりと伸び、白銀の頭が優雅に下げられて、まことに見事な礼が送られる。そのあまりに美しさに姫はしばし茫然とし、思わずかまいませんと呟いてしまった。腹立ちがぶり返したのは、扉が閉じてからしばらく後である。

しかし直ぐに文箱が気になり、寝台を飛び降りて駆け寄った。執行書の跡を残す様なものはないと思ったが、念のために一枚一枚確

かめていく。案の定あるのは添削答案ばかりで、他の悪戯の証拠になるものなども一つもない。安堵したものの、そこで首をひねった。もとより悪戯など仕掛けた覚えもないのに、どうしてそう思ったのであるうか。

窓の外に目を向けた所で、いけないと呟く。どのくらい寝ていたか分らないが、大分に陽が傾いている。カボチャ畑への遠征予定を思い出して、姫は部屋を飛び出していった。

見つけた抜け道の中でも、城外へ出るこの経路は大発見中の大発見である。父王専用のトイレの棚奥から入り、薄暗い狭い通路をうねうねと進むのだが、この通路自体がまた迷路になっていて、いくつもの脇道があちこちへと延びている。逆からの侵入者を防ぐためと思われ、帰路は慎重に辿らないと一生出られない危険があった。が、城外へは一本道に等しく、警護詰所から失敬して私物化したカステラを片手に、姫は通路をひた走った。

出口はカボチャ畑に建つ小屋である。その床板を外して這い出た姫は、あれ、と首を傾げた。隙間だらけの羽目板から洩れるぼんやりとした光の中に、以前はごたごたと置かれていた農具が、今はきれいに片づけられ整然と並んでいる。その中で、窓際の台と側に立てかけてある鏡が目をついた。木枠だけの窓には、カーテン代わりのボロ覆いが掛けられている。

外を覗くと、山の斜面に下るカボチャ畑と王宮の白い城壁や塔、更に向こうには海が広がり、湾を行く船が手に取るように見えた。

そこへ、畑のあぜ道を上ってくる者がいる。一人は丸々とした小男、もう一人はノッポの若者で、二人とも畑のカボチャに負けないくらいの赤毛だった。長い大きな物を二人して担ぎ、小屋から少し離れた所に着くと、手にしたシャベルで地面を掘り返す。やがてその穴に据え付けられたものは、大きな案山子だった。

「これで、カボチャ泥棒が逃げるんでやすかね？」

「さあ？ でも、カボチャ泥棒の心配もしなくちゃならないなんて、

給仕長つて大変な仕事なんだね」

男達は言葉を交わして汗を拭い、もと来た道を下って行った。彼らの姿が見えなくなり、そろりと小屋を出た姫は、案山子の傍に駆け寄った。近づくと思つた以上に大きく、擦り切れてはいるものの礼服を着ている所など、まるであの給仕長が磔になつてゐる様だ。

麦わら帽子の下顔が一瞬にやりと笑つたような気がして、背中がゾクリとする。良く見ると、人の顔にくり抜かれたカボチャだつた。

——カボチャ泥棒？

あの光は、泥棒の仕業なのだろうか。姫は首を捻りつつ、案山子をぐるりと一周した。どうやらこれはタニヤザールが作らせた物らしいが、こんなものが役に立つのだろうか。

再び見上げた案山子越しに、西の空が色付き始めている。小屋に戻つた所で振り返ると、茜色を背にした案山子が黒々と浮き上がり、カボチャ畑に長い影を投げ掛けていた。

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？（前書き）

<登場人物2>

●タニヤザール

ラストバン王国王宮付き給仕長
身分は侯爵 竜騎士

>i25059—2517<

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？

東の海から上った満月が中天を過ぎ、西へ落ち始めている。エリダナ・チェローミア姫は暗闇の小屋で盛大な欠伸をした。

あれから王宮に戻り、いつものスケジュールをこなして床に付いたのだが、どうにも気になって眠れない。身の回りにもどこか不穏な空気があつて、ヴァーリックの姿も見えない。もつとも、外回りの仕事之急に入ることはいつもの事なので、カボチャ泥棒に関係しているかどうかは分からないのだが。

枕の上で暫く悶々とした後、結局自分で事の真相を突き止める事にした。

真夜中の暗がりを怖がった事のない姫にとって、夜行は容易いことである。お化けや妖怪がいるのなら会ってみたいと考えながら、二度目の大欠伸をして、ハテ、と首を傾げた。光が見えたのが昨夜の事で、果たして連夜で現れるか疑問を持ったのだ。考えている内に今夜はハズレではと思われ、引き上げようと立ち上がった時である。抜け穴の出口である小屋の床板が、ごとごとと音を立てて外れた。思わぬ所からの侵入者に、姫は驚いて壁に立てかけてある農具の陰に隠れた。

穴から現れた人影は、大きなランプを手にながら窓辺へ寄ると、ボロ覆いをめくって外を窺った。台の上に置かれた灯りが照らした顔に、姫は息を呑む。学習室から、文具と綴り方の答案用紙を律儀に運んでいた召使である。カボチャ泥棒と言うからには、空腹の外の者かと思っていたので、これはどういう訳かと新たな疑問が浮かんだ。

自身が食道楽の父王は、家来達に与える食べ物にも結構気前がいい。もちろんカボチャ料理も出るが、もっと美味しい物を口にすることができるはずである。それとも、外の畑にあるカボチャには、

他の者がほしがる何かがあるのだろうか。

召使は、ランプを挟んで窓と反対側に鏡を立て掛け、ボロ覆いの端を掴んで上げ下げを始めた。光がチラチラ瞬いたのは、このせいかと合点がいき、引き続き観察していると、破調での動作に区切りがあることに気が付いた。少し長めの休みをとって、同じ間隔で二度三度と繰り返し返される。間違いなく、これは何かの合図だ。いったい外の何に送っているのかと気になって、羽目板の隙間へ首を伸ばす。

その途端、立て掛けてあった鍬が倒れた。しまったと思い、振り向いた召使を見て一層の衝撃が走る。つり上がった目がギラギラと異様に輝き、学習室を行き来していた生真面目な人物とはまるで別人だ。顔面に現れた妙な筋は光の加減とも思えず、尖りだした鼻がひくつき、笑いに歪んだ口元から牙が覗いた。

「これは……」小屋の中を見回し呟く召使。「……思いもよらぬお方がいるようだ」

姿は見つかっていないはずだが、一步一步確実にこちらへ近づいてくる。ランプの灯を背にした黒い影がだんだんに大きくなり、視界いっぱい広がっていく。恐怖で固まりつつも武器はと見回し、倒れた鍬に手を伸ばそうとした、その時。

「動くな!!」

小屋の扉が叩き壊され、数人の兵がばらばらと入ってきた。先頭でサーベルを抜いているのは、あの警護隊長だ。

「大人しく投降しろ!!」

だが、召使は覆いのかかった窓の外に身を投げ、照明の取り巻く真中へ飛び込んで行った。

「外に出たぞ!!」

警笛の響きと共に、警護兵たちが一斉に外へ向かう。残された姫は、農具の陰でほっと息をついた。良くは分からないが、大捕物の準備はすでに整っていたらしい。木枠だけになった窓から覗くと、眩しい光の中で、召使と警護兵の激しい剣戟が繰り返されている。

多勢に無勢と思いきや、この召使の反撃に兵士達は苦戦を強いられていた。彼の重い一撃をくらうと、まるで人形のように飛ばされてしまい、屈強のはずの警護兵が圧倒的な力の差に手も足も出ない。

賊が逃走路を求めて次第に小屋から離れて行くので、首を伸ばしてもなかなか様子が知れなくなる。かと言って表は危険なので、どうしたものかと小屋の中を見回すと、隅に立てかけてある梯子の先が、屋根の空いた穴に届いていた。

小屋の上は思った以上の景観である。兵士が手に持つ灯りが幾筋も畑や夜空に交錯し、金属音が耳に響くたびに暗がりには白い光が瞬いた。逃げる曲者に兵士達は必死に追い縋ったが、次第にその数が減っていき、今にも包囲網を突破されそうである。何をしているのです、と姫が口の中で呟いた時、行く手に黒い影が立ち塞がっていた。しかし期待したのも束の間、それが例の案山子だと気付くと、たちまち力が抜け気が萎える。

だが——その案山子が動いた——ように見えた。

案山子の側から現れた丈高い影に、逃亡者が飛びかかる。その剣先を、大剣が月夜を裂くような音を立てて薙ぎ払った。それまで誰をも寄せ付けない強力を誇っていた曲者の体が、初めて後ろへ跳ね返されたのだ。照明が地に倒れた召使に集まり、彼の驚きと恐怖にひきつった顔を照らした。月を背にした影がゆっくりと歩を進ませ、射す灯りの中で、その胸当てと髪が白銀に煌めく。

「タニヤザール——」

姫の口から思わず出た叫びが、そこにいた者達の視線を一斉に集めた。ヴァーリックの一つ目はもちろん、タニヤザールでさえ銀の目を固まらせる。まさかの顔を屋根の上に見つけた兵士達の虚を突き、曲者がいきなり跳躍した。誰もがよもやと思う一跳びに、降り立ったのは姫の目前。驚く間もなく強い力で抱え込まれ、気付いた時には白刃が鼻先に突きつけられていた。

「近寄るな——」

召使が必死の声を上げた先は、早くも屋根の上にまで追ってきた

給仕長である。

「離せ」タニヤザール低い声が響く。「どの道逃げ切れん」

深く長い唸り声が耳元で上がり、姫はごくりと喉を鳴らした。彼女を抱え込んでいる腕が妙に毛深い。いや、毛深いを通り越して、まるで獣の——犬の様な——狼の様な……

——獣人……！？

しかし、先程まで召使は確かに人間だったはずだ。人間から獣に変わる事など、あるのだろうか。タニヤザール達はこれの正体を知っているのだろうか。

およそ目の前の危機よりも、疑問に頭が一杯になった姫は、いきなり宙に浮いた体に目を丸くした。逃亡者が人質を抱えたまま再び跳躍し、小屋の裏の林の中へ跳び降りたのである。月の光も届かない濃い影の中を、まるで陽の下のように、凄まじい速さで苦も無く走り抜ける。空を切る風と共に、下生えの葉や枝が次々と顔を打つので、痛くて目を開けていられない。それでも時折窺う薄目越しに、木の間から追っ手の明かりが見えるたび、曲者が舌打ちをして進路を変えるのが分かった。

どのくらい経ったのか。激しい息遣いと共に、逃亡者は走るのを止めた。姫がそっと目を開けると、足元は林を抜けた崖の上で、赤みがかった月が低い空に懸かっている。その影に浮かんだ召使の顔を見上げ、姫は思わずうわあと口を開いた。目の前にあるのは完全な狼の首で、姫を抱えた腕だけが、どうにか人間の面影を僅かに留めている。走っている最中に服も脱げたらしく、全身を覆う豊かな毛が灰色に波打っていた。

警護兵の包囲網を破って逃げ切れたのだろうか、人質の自分はどうなるのだろうかと思った矢先、再び逃亡者の目に凶暴な光が浮かんだ。体中が総毛立ち、攻撃に備えて筋肉が緊張する。

「言っただけだ」

急に掛けられた言葉に、姫も驚いて振り返った。崖際に張り出した岩の上から、大剣を手にしたタニヤザールが見下ろしていた。

「逃げ切れないと」銀の目が不気味に細められる。「……殺せまい」この給仕長も、王宮で見せる姿とは全く違う。全身から何かが立ち上り、周辺の大気が揺らめいて見える。

獣の強くなった唸りと共に、血走った燃える目を向けられ、姫は固唾を呑んだ。給仕長は余計な事を言ったのではないだろうか、ほら、捲れた口から牙があんな……

と、いきなり強い力で押し出され、体から重さが消える。一瞬、駆け去る獣の後ろ姿が見え、くるりとひっくり返る天地。月がゆっくりと足元へ落ちて行く。

いや、自分が落ちているのだ。どこを？——崖を——下へ——
——これで、死ぬ……？

月を見ながらそう思った瞬間、銀に輝くものが突然宙に現れた。翼が大気を打つ鋭い音が響いて、溢れる煌めきが眼前を横切る。

——竜だ！！

長い尾を引く竜が身を翻し、姫をその背に乗せようと傍らに寄ってきた。

虹色に透ける翼、白光の瞳、光の粒子を飛ばす細かな鱗の一つ一つまで、手に取るように迫ってくる。

——竜だ！ 竜だ！ 竜だ！！

姫は歓喜に叫んだ。

「竜が来た！！」

「もう少し、小さい声で」

日常で聞き慣れた声が囁き、姫は目を瞬かせた。竜の光を見詰めていると思っていたら、月の光を映すタニヤザールの銀の瞳である。あれ、と呟いて、目の前の給仕長の腕に抱えられているのに気が付いた。彼はと見れば、もう片方の手で何やらの綱につかまり、共に崖に宙吊りになっている。

「お前が助けたのですか？」

「左様にございます」

例によつて慇懃な答え。では、あの竜は何だったのだろうと思いつながら、姫はタニヤザールの顔をまじまじと見つめた。

「何でしょう？」

片眉を上げて視線を返してくる。

「タニヤザール」

「はい？」

「ありがたく思います」

給仕長は目を細め、どういたしましてと小さく口端を上げた。

「あれは、獣人ですか？」

頭に引つ掛かつていた疑問には、人間から獣に変身する獣人がいるとの答えがあつた。彼らは変身した際、常人離れした恐ろしいまでの力を発揮するそうだ。

「私のせいで、曲者に逃げられてしまいました。申し訳ありません」

「いえ、御懸念には及びません。抜かりはございませんので」

でも、と言いかける姫に、にっこり微笑む。

「ラストバンには、竜も虎もおりますれば」そこで顔を上げ、大声を張り上げた。「イルグ！！そこにいるか！！？」

月光のぼんやりとした崖の縁から、灯りを手にした人影が手を振つて、ここにおりますとの警護隊長の声が返ってきた。では姫、とタニヤザール。

「腕を組んでください……そう、そのまま」

再び顔を上げて叫ぶ。

「イルグ！ 姫だ！ いくぞー！！」

抱えていた腕が力強く振られ、エリダナ・チェローミア姫の体が、今度は上に向かって落下する。たちまち遠のく竜の銀。

金の髪を、エプロンのフリルを、スカートの裾をふんわり広げ、目も口もまん丸にした姫の姿は、妖しげな赤い月影の中を浮遊した。周囲には竜の発する細かい光の粒が、ちらちらと瞬いている。

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？（後書き）

< 語句説明 >

- 「竜」と「虎」

本編および続編の登場人物

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？（前書き）

<登場人物3>

ヴァーリック

ラストバン王宮警護隊長

エリダナ姫お気に入り側の側近

> i 2 5 0 5 8 — 2 5 1 7 <

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？

「ニイルの方は逃げられたようです」報告したヴァーリックは、憤慨に堪えない面持ちで言い放った。「全く馬鹿な奴です。誘惑しているつもりが、手玉に取られているとは露知らず、易々と警備情報を漏らすとは！！」

「それだけ相手が強かだったというわけだ。指名手配を受けている大密輸団の首領が本気でかかれば、警護隊の副隊長を操るなぞ手の上に乗せる様なものだろう」執務室の机の向こうに座るタニヤザールは、そこで肩をすくめた。「私達も彼の事は云えんよ。なにしろ、姫君の教師として雇ってしまったのだからな。デブアの紹介状を偽造するとは、考えたものだ」

「まったく女は見かけによりません」

清楚で純情そうな佇まいを思い出し、警護隊長は低く唸った。

この犯罪組織は、どの国の王宮や城内にも必ず一人か二人の間者を忍ばせ、いざという時の活動に備えていた。例の召使も勤続八年にはなる中堅で、王宮内の家来衆の受けも良かったのである。彼は時間をかけて宮内を探り、厨房裏庭の野菜倉庫の中から力ボチャ畑の小屋に通じる抜け道を発見していた。

「しかし考えましたな。姫の綴り方の答案用紙を利用して、情報を伝えるとは……」

警護隊長の言葉に、タニヤザールはくすくす笑った。

「私も偶然見つけたのだがね。あまりに姫の学業成績が、特に綴り方が壊滅的なので、覗きに行った矢先、妙な言葉が目についたのだ」覗いた角度からか、それは『悪戯』と読めた。最初は偶然だと思っ

た。その頃、裏の力ボチャ畑での光について内偵を進めていたが、光る日が不定期な上、小屋に誰かが入る形跡も認められず、なかなか

正体が知れない。光った所を踏み込んでみても、いつも中はもぬけの殻である。気掛かりのまま、姫の学力不振にも対処しなければと思っていたタニヤザールは、添削済み答案用紙に目を通すことにした。

何気に先日 of 言葉を思い出し、意識して見ると、果して数枚にそれが認められる。更に別の紙には、もう一つの言葉も。

――『悪戯』と『お菓子』。

その書かれた日付が、光の瞬く日と一致した。また『悪戯』の日とは、とある沿岸場所の警備が強化される日でもあった。湾岸警備隊は、密輸団がティムリア近郊で取引を狙っているとの情報を受け、王宮警護隊へ助力を求めていたが、その責任者が浮名の多い副隊長である。そこから考えるに、『お菓子』は『悪戯』の逆と思われた。この答案を目にすることのできる人物はといえば、限られてくる。そこで浮かんだのが、女教師と姫の文具を運ぶ召使だった。二人は繋がりが悟られないよう極力接触を避け、姫の答案用紙を利用し、遙かな海上からでも見渡せる王宮の裏山から、沖合の船に合図を送っていたのである。

そしてこの日、答案には『お菓子』との言葉が記され、まさしく警備の薄くなる日だった。タニヤザールから連絡を受けた湾岸警備隊は、薄い警備と見せかけ、上陸した密輸団を一網打尽にしたが、肝心の首領は取り逃がしたのとの報告が先程もたらされたのである。「姫も無事だったし、召使も確保したし、今回はこれで良しとしよう」

タニヤザールは椅子から立ち上がると、窓の外に広がりだした朝焼けに目を向けた。

「姫には今回はまた、特に驚かされましたな」大きな溜息をついた警護隊長が、そこで給仕長の顔を上目遣いに窺う。「しかし……あの最後は、やり過ぎでは？ 助けられた後に、まさか放り投げられるとは思わなかったと、ベそをかいておられましたよ？」

ふん、とタニヤザールは彼には似つかわしくない鼻息を、景気良

く鳴らした。

「少しは身に染みていただかなくてはな。あの案山子の所で追い詰められたものを、とんだ手間がかかった」残念そうに口の中で呟く。「もっと、泣き叫ぶかと思ったが……」

ヴァーリックは気付かれないよう、隻眼をくるりと回した。落ちてきた姫を受け止めた際、腕に滲みて来た生暖かな感触に驚いていると、ふくよかな口が耳元で囁いたのだ。

——内緒にしてください……お願いします。

警護隊長は、姫の名誉を守った。

エリダナ・チェローミア姫は、学習室の机の前でかしこまっていた。

昨日は目覚めたのが昼近くであったが、事情を知っているのか、シャーリンは何も言わず、授業も行われなかった。未明の混乱が嘘のように穏やかな一日が過ぎ、日が改まる。

学習室の扉を開けて入ってきた人物を見て驚いた。タニヤザールが台股で教師用の机に着き、おはようございますと挨拶した。

「先日までの女教師は解雇いたしましたので、次が決まるまで私が指導いたすことになりました」

優しい笑顔を思い出し、がっかりしながら、何故ですかと訊くと、給仕長は軽く頭を下げて答えた。

「姫君の学業成績が少しも上がらず、指導力がないと判断されたためです」

あの答案の束を覗いていたのは、そのためかと合点がいく。しかし、この給仕長に習うとは何やら不吉な予感がした。

「でも、お前も忙しいのですから、他の者が良いのでは？」

表面は気遣う様な口調に、銀の目が不敵な笑みを浮かべた。

「いえ、彼女を雇った責任もありますし、なにより、私と姫との間

には会話が不足していると思われるので、これを機にいろいろ話し合いとうございます」

目を瞬かせる姫へ小首を傾げ、何かご質問は、と訊いて来る。しばらくの沈黙の後、姫は机に手をつき身を乗り出した。

「あの曲者は何をしたのですか？」

興味津々に向けられた子猫のような緑の瞳を、給仕長は一瞬驚きの眼で見返した。と、口の両端を上げ、細い体を折り曲げて姫の顔を覗き込み、声を潜ませる。

「あの者は我がラスタバンの秘密を探りに来たのです」

ファステリアのチャイ麦のように、ラスタバン農業会は最高級力ボチャの品種改良に取り掛かっており、これが成功すればラスタバンに莫大な利益をもたらすとタニヤザールは言った。

「これは極秘中の極秘です」

どうぞこの事は絶対に口外なさらぬようにと、最後は重々しく告げられたので、姫は緊張に喉を固まらせ頷いた。国の命運を握る秘密を明かされ、責任の重大さを覚えて身震いがする。これこそ王女が知るにふさわしい情報である。

では、と給仕長は体を伸ばした。

「とりあえず今日は綴り方の練習をいたします」

懐から出し、学習机の上に置いた紙片を見て、姫の眼と口が驚愕に真ん丸になった。間違う方無き、例の死刑執行書である。

「多少は汚れておりますが、まことに素晴らしい出来でございます」
姫が書かれたのですね、と訊くので、口の中ではいと答えた。

「綴りの間違いもなく、またそのお年とは思えない手跡で、ほとほと感心致しました。ただ一つ誤りがありましたので、書類不備として受け付けられませんでした」長い指が、文章の最後を示す。「この名の者が実在しないためです」

そこには給仕長の名が書かれている——はずなのだが。

「『ねべど・あしたる・たにやざる』なる人物は、ラスタバンにおりません」タニヤザールは、そこではんと手を打ち鳴らした。「か

く書類を見て私は確信いたしました。わが姫君は、やる気を出せば、素晴らしい成果を上げられる事が。しかるに厳しくご指導した暁には、類稀なる才能を発揮されるでありましょう」

というわけで、本日はこれを練習していただきたい、と書類をひっくり返した裏面の上段に、見事な手跡で給仕長の名がある。家来の名も満足に書けなくては死刑にはできませんよとの言葉に、姫は頬を引きつらせて給仕長を見上げた。

「その紙面一杯に書き終えましたら、この書類をどのようにお造りになったか、おっしゃっていただきます。ええ、きっちり。隅から隅まで。全て些細洩らさず」

決然とした声が上がら降ってくる中、姫は震える手でペンを握った。

そして、恨み重なる家来の名を書き始める。丁寧に、丁寧に、それは何度も繰り返し返される。

『ネヴィド・アシユタル・タニヤザール』

竜の慈しむ銀の眼差しが注がれていたが、今の姫には知る由もない。

(了)

エリダナ・チェローミア姫の陰謀？（後書き）

エリダナ姫のデビュー編をお読みくださり、ありがとうございました。

姫の四季をめぐるお話が、これからいくつか続きます。
次回は年末のお話です。

また本編は「ラストバン王の給仕」という長編です。同じくここで載せておりますので、よろしかったらこちらもお読みいただけたらと思います。とても長いお話ですが、イデインの世界が詳しく描かれていますので、この短編の背景が分かりやすくなると思います。

ヤマネの夢？（前書き）

> i 3 7 8 9 5 — 2 5 1 7 <

イデインの年の瀬。

王宮裏の林で姫が拾ったものとは？
歳末助け合いのお話。

ヤマネの夢？

お日様が弱くなり、木の葉が全部なくなると、大つごもりが近づいたしるし。

大地の精霊たちは、暖かな穴にこもるヤマネ達を探します。ヤマネがみる、夢の春の中で過ごすためです。

でも、お腹がいっぱいでないと、夢の中に入れません。精霊たちは竜にたのんで、道の近く、里の近くに運んでもらいます。そして、優しい人が来るのをじっと待つのです。

ですから大つごもりが近づいた日、あなたをじっと見つめているものは、それはきつと精霊ですよ。お腹が一杯になるように、食べ物あげましょう。

精霊はきつと喜んで、ヤマネの夢の中で、あなたのことを何度も思い出すでしょう。

* * *

「タニヤザール！ ヤマネが見たいです！」

エリダナ・チェローミア姫が叫びながら、執務室へ飛び込んできた。そら来たと思いつながら、給仕長は食事の手を休めず片眉を上げた。

「家来の部屋とはいえ、取り次ぎを通すのが礼儀ですよ」

「それは失礼しました！ さあ、ヤマネはどこです！？」

注意など意に介さず、姫は執務机にかじりつくと身を乗り出し、矢継ぎ早に言葉を放った。

「見せてくれるといいましたよね！ ヤマネがどこにいるか知っているでしょう！ さあ、教えなさい！ そこへ連れて行きなさい！」

「姫君、私は昼食の最中なのです。しかも食べながらも仕事をしな

ければならないほど、忙しい身です。察していただきたい」

タニヤザールが脇の書類の山を示したが、姫はふんと鼻を鳴らした。

「お前は私の先生です。これもお仕事です。それに忙しいので、手伝いが来ているのでしょうか？ 私は知っているのです」そこで、カップに黒茶を注いでいる異国顔の青年を指さす。「そら、紙のお仕事など、この者にやらせれば良いのです。さあ、ヤマネです！」

午前の学習時、家から持ってきた絵本を姫に渡すと食い入るように読みふけり、終業も気づかないほどだった。そこで、いずれヤマネをお見せしようと言ったのだが、その実行を姫は早速迫ってきたのだ。タニヤザールは小さく溜息をもらすと、白銀の頭を傾げて頷いた。

「今はいけません。が、二刻ほど後に手が空きますので、その時お連れいたしましょう」

「それはダメです」

姫がきっぱりと断じたので、給仕長は、なぜですかと返した。

「二刻もしたら暗くなって森は歩けません。今は暗くなるのが早いのです」

銀の目が驚いて、脇の青年と顔を見合わせた。

「先日お教えいたしたことを覚えていらしたとは、喜ばしい限りです」

「私はオロカモノではありません」姫は顎を反らした。「ですから、お前が忙しいことは分かりました。今日がダメなら、明日行きましよう！」

「明日もちよつと……」

給仕長が言いかけると、姫の幼いながらも形の良い眉が上がった。「では、あさつてです！ もう待てません！ あさつて行けるように、夜も寝ないでお仕事をしなさい！」

姫は勢一杯威厳をもって命令すると、くるりと背を向け、では、と部屋を飛び出して行った。

例によつて秘密の通路を通り、裏山の農具置き場の小屋に出た。小屋の外は穫り入れの済んだカボチャ畑が斜面を下つて広がり、幾つか取り残しの実が転がっている。こんな所にまで外の者が来るとは思えないが、収穫は必ず取り残すのがイデインの習慣であつた。畑に目を巡らせた姫は、カボチャの品種改良は進んだのかと思いつつ、小屋の裏の林に足を向けた。

洞を探して、木々の上を目で追う。葉を落としたブナやナラが雲の多い寒空に枝を伸ばし、常緑樹の茂みが暗い影を投げかけていた。地は落ち葉で厚く覆われ、歩を進ませるごとに、枯れた音を立てて柔らかく足が沈む。時折、冷たい空気を裂いてモズの甲高い鳴き声が上がリ、微かな羽ばたきがそれに続いた。

間もなく一本のカエデに、小動物が籠りそうな穴を見つけた。大抵は鳥の巣だが、ヤマネかもしれないと思うと、いても立ってもいられない。靴と靴下、ついでに外套も邪魔とばかりに脱ぎ捨て、太い幹に取り付いた。木登りは大好きな警護隊長直伝である。やがて到達した小さな洞を覗いてみたが、弱い光の中は暗く何も見えない。突っ込んだ指先に枯れ枝らしい感触。その途端、激しい鳥の鳴き声と共に黒い羽ばたきが襲つてきた。突かれる頭を庇つた拍子に足が滑り、景気よく真下へ落ちる。幸い落ち葉の吹き溜まりだったが、あまりの柔らかさに体が沈み込み、もがく羽目となつた。

不意に周囲が暮れたように陰る。空気を打つ力強い翼の音が一つ上がり、ざあつと林の中を吹き抜ける風。やつとのもので起き上がった時には、舞いあがつた枯葉が木間一面に散っていた。目を瞬かせた姫は首を傾げ、裸足のまま歩み出した。そして、暫く行つた先の樅の木の影で見つけたのである。

「動物を拾つた？ 姫が？」

翌朝、隻眼の警護隊長から報告を受けたタニヤザールは訊き返した。

「警護兵詰所の棚から、毛布と水筒が無くなっています」ヴァーリックが笑いを噛み殺しながら頷く。「朝食時にはパンとハムをエプロンのポケットに忍ばせておいででした」

ふむ、と給仕長は呟いた。

「ヤマネにしては大きいな」

「どこで何を飼っているかわかりませんが、お言いつけならば探ります」

警護隊長の言葉に、タニヤザールは首を振った。

「いや、その必要もないだろう。まあ……ばれたらシャーリンが煩いだろうが、子どもには秘密がつきものだ」

養育係の意向を立てつつも、給仕長が姫の自由を尊重している事に、ヴァーリックは嬉しく思う。しかし、エリダナ・チェローミア姫相手では、それがどんなに覚悟のいる事か、この心優しい男にはまだ分かっていなかった。秋の終わりに発覚した姫の秘密計画は、タニヤザールと父王の胸の内にだけにある。

「予定の日課には、ちゃんと時間通りに来ているので、遠出ではあるまい。王宮の敷地内ならば、そんなに危険はないからな」敷地と言っても広大だが、七歳の子どもの徒歩圏内は想像がつく。「まあ、これから授業なので、気を付けて様子を見ておこう」

姫の教師代理であるもタニヤザールは、棚から算数のテキストと手作りの絵本を取り出すと、学習室へ向かった。

机に向かうエリダナ姫が秘密持ちであることは、一目瞭然だった。陶器のような頬をバラ色に染め、波打つ胸は全速力で走ってきたことを物語っている。朝食からの間に、どこかに行っていたに違いない。タニヤザールは気付かないふりをして、手持ちの絵本を姫に渡した。

「今日は音読をいたします」

「はい」

少女は元気よく返事をする、エクボを浮かべて読み始めた。しばしば言葉が途切れるのは、どうやら描かれているヤマネに見入っ

ているせいらしい。ようやく読み終えて、深くもれる溜息。本から上げられた夢見る眼差しに、これはますますこの絵本と関係がある事柄だとタニヤザールには察せられた。第一、昨日あれほど執念をみせた「ヤマネ」の「ヤ」の字も向けてこない。終業後、名残惜しそつに絵本を返したものの、学習室から出るなり、姫はたちまち姿を消した。

昼食時には駆けつけたテーブルで、再びポケットに隠されるパンとチーズ。これが養育係の目に止まらなかったのは、ひとえに警護隊長の陰の協力による。ただ少女の瞳に走る陰を、ヴァーリックは見逃さなかった。

おやつと夕食時も同様に食料調達が為されたが、次第に沈む姫の表情が、警護隊長の心に屈託となって膨らんでいった。

ヤマネの夢？

「今夜は冷えますね」

そう言いながら、ラウィーザが暖炉に薪をくべた。勢いを増した炎に目をやり、今度の冬は厳しいぞと思った所へ、警護隊長が執務室に入ってくる。

「警備配置図ができました」

タニヤザールは差し出された書類に目を通した。

「いいだろう。例年に比べ、強化しているな」

「はい。今年来る外の者は、いつもの倍近いと聞きましたので」

この時期をイディンでは『喜捨の旬節』と呼び、街街で食料の無料配布が行われる。ティムリアでもそれを目当ての貧しい外の者が大勢集まるため、その混乱防止に、軍隊、警察が動員されるのだ。

「喜捨の集まり具合も、かなり良いそうですね」

ヴァーリックの言葉に、給仕長は笑って応えた。

「高額喜捨の者には王宮新年拝に参列できるというのが、金持ちの自尊心をくすぐったようだ。こちらの思惑通りさ」

「しかし、よろしいのですか？ 竜法院の許可も得ずに……」

懸念するラウィーザに、軽く肩をすくませる。

「いずれの新年拝に出ようが自由だし、喜捨は集まるし、会場提供の陛下の許可は取ってあるし、どこにも問題は無い」形のいい鼻から漏れる息。「参列者が多いので、かえって一級祈祷師の気合いが入ると言うものだ」

祈祷師に対するには畏れ多い物言いに、警護隊長と給仕長補佐の青年は互いに顔を見交わした。

「今年は早い時期から準備にかかったので、私が最後までいなくとも何とかかなりそうだな」そこで銀の目が細められる。「計らずも姫のお言いつけ通りに、明日には手配が終わりそうだ」

「姫と言えば、夕刻詰め所の湯たんぼが無くなっていました」

ヴァーリックが手を腰に当てて頷いた。

「やはり生き物ですな。この寒さはちときついですから」そこで眉を寄せ、昼からの心配を口にする。「ただ……どうも、姫の元気がありません。いえ、体調はよさそうですが」

言葉の途中でタニヤザールが口元に人差し指を立て、執務室の扉へ視線を向ける。気付いた警護隊長は足早にそちらに向かい、静かに外を窺った。と、これはと呟き、青い制服の体を開く。その陰から現れた白い小さな姿は、外套を着込んだエリダナ姫だ。毛布の塊を抱き、今にも泣きださんばかりの顔を向けてくる。

「……はあはあ言ってるのです」寒さが嚙り泣きのせいか、鼻の頭を赤くさせ、唇が震えた。「昨日は、元気に食べたのに、今日はちつとも食べないのです」

タニヤザールは立ち上がると、姫の元へ歩み寄った。身を屈めて少女の顔を覗き込む。

「お水をあげても少ししか飲まなくて……ほっぺがふくらんで、泣いてばかり」銀の優しい眼差しを注がれ、姫の両目からぼろぼろと涙がこぼれ出す。「タニヤザール、助けてください……助けて」

泣き声と共に、姫は腕に抱いた塊を給仕長に渡した。毛布の間から現れたそれは、両手に乗る程の大きさで、三人の男達が初めて見るものだった。

赤ん坊にしては小さすぎ、ヤマネにしては大きすぎる生き物が、苦しそうに体を丸めている。熱い息が漏れる口元からは、木の実をかじるのに似合いそうな前歯が覗いていた。

「……竜が連れてきた、大地の精霊なのです」

姫がしゃくりあげながら、言葉を継いだ。

姫を寝かしつけ、ヴァーリックは執務室に戻った。大欠伸をしながら王宮医師が隣の仮眠室から出てきた所で、ラウィーザが彼を見送りに行く。診察も終わったのだろつと覗いた隣室では、タニヤザールが仮眠用の寝台に寝かされた生き物を見下ろしていた。警護隊

長に気づいて、組んだ腕を疎める。

「リス族の獣人の子もだ」

ヴァーリックは隻眼の目を見張った。

その昔イデインには、多種多様な獣人達が数多くいた。しかし、この数百年の間に人間との混血が進んだためか、急速に数を減らしている。特にリス族など小柄な種族は姿を消し、絶滅したのではと思われていた。イデインを広く歩き回ったタニヤザールでさえも、初めてこの種族を目にしたのである。

「小さいが、人間でいうと四歳児にあたるらしい」

「いや——姫が大地の精霊と言うので、驚きました」

ヴァーリックは、寝る前の姫から聞いた裏山での経緯を伝えた。

「何でも、お腹一杯食べさせれば、ヤマネの所に行くだろうと思っただので、今まで連れてくるのをためらっていたそうです」小首を傾げる。「いったい何の事やら、サッパリですが」

「かなりヤマネにご執心だったからな」

タニヤザールは唸ると、丁度部屋に入ってきた給仕長補佐の青年に声をかけた。

「ラウイーザ、君はおたふく風邪は済んでいるな」

「あ、はい」

目を瞬かせて青年が頷くと、その肩を叩く。

「では悪いが、この子を看ながら書類の確認をしてくれないか。病状は落ち着いたものの、一応朝まで目を離すなど医者が言っていたのでね」

「承知いたしました——それは、つまり」

ラウイーザは、子どもの膨らんだ頬に目を落とした。

「つまりこの発熱は、おたふく風邪のせいなのさ」タニヤザールは、再び目を丸くした警護隊長に苦笑した。「姫に感染っている（　　）のは間違いない。もう隠しようがないな。シャーリンから大目玉だ」

その言葉通り朝食が終わる頃、小太りの養育係が非常な剣幕で執

務室を急襲した。覚悟を決めていた給仕長と警護隊長は、姿勢を正して彼女の怒りの舌鋒を受け止めた。この二人が陰で支えていたとは、姫には知る由もなかったが、毛布や湯たんぼの背後に潜んでいる者を、彼女はたちまち看破したのである。

「姫様はお熱がおありで、主治医がおたふく風邪だと申しました」
遙かに背の高い二人の顔を交互に見上げながら、シャーリンは若い時から変わらない柳眉を逆立てた。「いったい何から感染ったんですの？ ええ、大地の精霊などと、世迷い言は聞きたくありません」
そこで仮眠室へ案内すると、まあ、と一声上げて寝台に駆け寄った。リス族の子ですとの説明に、まあまあ、あらあらあらと表情を和らげて、ふわふわとした小さな顔に、そつと手を触れる。タニヤザールは養育係の怒りが解けて安堵した。シャーリンのような女性は、何より愛情が優先するのである。彼女は、たちまちこの子の保護者とばかりに、病状と行く末を案じた。

「ただ今、リス族を見かけなかったかと、ティムリア周辺を探らせています」

首に下げた迷子札が見つかり、両親の名も分かっている。養育係は警護隊長の言葉に大きく頷き、身内が来たら知らせるよう、また今後こんな事がないようにと釘を差して退出した。

幸い北街道沿いの駐屯所から搜索願いが出ていた。翌々日には訪ねてきた両親が、王宮奥深くに案内される。イデインの頂点である場所に、二人は小さな体をますます縮込ませたが、寝台上の子どもを見るなり歓声を上げた。子どもを抱き締め再会を喜んだ後、周囲に忙しく感謝の頭を下げる。

「ええもう、何と申してよいやら言葉もございません。助けていただいただけでなく、こんな柔らかい寝台に寝かされ、おまけに御医者様まで御世話してくださるとは」

父親の成人ながら円らで可愛いとしか言えない瞳を向けられると、誰も心にほっこりしたモノが浮かんでくる。しかし子どもを抱き

上げ、すぐにも連れて行こうとするので、同席していた養育係は急いで言葉をかけた。

「せっかくですから、治るまでここにいらしたら良いでしょう」

「いえいえ、そんな畏れ多い事はできません。ここまでして頂いただけで充分でございます」

「でも……」

言い淀むシャーリンに、タニヤザールが助け船を出す。

「ですが、流行り病では宿屋が嫌がりますし、野宿では治るものも治りません。ここで落ち着かないのでしたら使用人の部屋に移しますが、いかがでしょう？」

それを聞くと獣人も素直に頷いたので、その場の面々は胸をなでおろした。これで姫にも申し訳が立つ。

早速、子どもは厨房裏庭の使用人棟の空き部屋に移され、両親ともども回復するまで滞在する事になった。伝染病でも使用人達が嫌がらなかったのは、殆どがおたふく風邪を罹患済みで、感染の恐れも無かったからである。

ヤマネの夢？（後書き）

おたふく風邪の潜伏期間は二週間ほどですが、この世界では一から三日の短期間のようです。ご了承ください。

ヤマネの夢？

着替えた給仕長が控え室から出てきたので、ラウィーザは顔を上げた。

「もう、出発なさいますか？」

この年末年始に上の姫が隣国からの招待を受け、タニヤザールはその供をする。この日が出立であったが、その支度が一刻程早かったのだ。

「最後にやり残しを片付けなければな」

タニヤザールは柵から取り出した絵本を青年に渡すと、付いて来るように言った。

彼らが向かった先はエリダナ姫の部屋である。丁度姉姫が出てきた所で、出発のご挨拶ですかと給仕長が問うと、細い首がコクリと頷いて顔が伏せられた。

「……かわいいそうなエリイ」

姉姫の妹思いは有名である。しばらくして肩が震えだしたので、下の姫の病状はそんなに悪いのかと、ラウィーザは眉を寄せた。が、手の当てられた口元から漏れ出たのは、まさかの忍び笑いだ。隠しようがなくなり、どうにも押さえきれなくなつた笑い顔を二人に向ける。

「笑つてはいけないのですが……エリイのあの顔だったら」うふふと、ついに声が上がリ、とろけそうな目配せを二人の男に送る。「私が笑つたなんて、エリイには内緒よ」

優雅にスカートを翻して上の姫は去つていったが、ラストバンは間もなく、この掌中の玉を隣国の王子に奪われる事になっている。一発ぐらい相手を殴つても良い気がしたラウィーザの横で、給仕長が扉を叩いて入室の許可を伺つた。

室内には赤々とした暖炉が静かに燃える。寝台の羽根布団の陰から金髪のお下げがはみ出しているが、新参者の気配を覚えてもピク

りもしない。タニヤザールは枕元に歩み寄ると、姫君、と声をかけた。

「お加減はいかがですか？ 先程姉様がいらしたように、私も間もなく出発いたしますので、ご挨拶に参りました」

布団の端がもそもそ動いて、眉間に皺を寄せた目が覗く。くぐもった声が発せられて、どうやらタニヤザールのバカと聞こえた。

「それは心外ですな。一日遅れましたが、お約束を果たそうと思いましたが、」些か意地悪な銀の笑みを浮かべ、小首を傾げる。「ヤマネをご覧になりたいのではないですか？」

「ホントですか！？」

給仕長の言葉に、姫は叫んで上半身を起こしたが、たちまち情けない悲鳴を上げて布団に突っ伏した。

「姫様！ 大口を開けてはいけません！」

慌てて差し伸べられたシャーリンの腕にすがり、上げられる苦悶の顔。思わず吹き出しそうになったラウィーザは、奥歯をいつぱいに噛み締めた。薄桃色の頬が耳下から見事に腫れ上がり、つやつやと光るばかりである。いつもの細い首がなくなって、膨らんだ輪郭がそのままデンと肩につながっていた。

「……見せてくれるのですか？」

目尻に涙を浮かべて、姫は囁くように訊ねた。顎を動かすと耳下の患部を圧迫し、痛みのためそろそろとしか話せないようだ。

「ここにお持ちいたします」

タニヤザールの答えに、青年は手元の絵本に目を落としたが、給仕長が向かったのは窓辺である。カーテンを引き開き、ガラス窓を開けると、冬の冷気が部屋へ侵入した。養育係が止めようとする前に、窓枠にかけた長い脚でひらりと外壁の縁へ出る。その姿が窓端に消えたので、ラウィーザは急いで駆け寄り外を覗いた。タニヤザールは壁石の出っ張りを伝って、少し先の雨樋の覆いの陰を探っている。やがて何かを手にとると、するすると軽い身のこなしで部屋に戻ってきた。

大股で再び寝台へ歩み寄り、姫の上に身を折る。

「お約束のものです」少女の見開かれた緑の目の前に、手にしたものが差し出される。「ヤマネです」

大きな掌には、小さな茶色の毛玉が乗っていた。姫の両手に移されても、黒い線の入った柔らかい玉の形はそのまま、密生した毛の中に眠った目が埋まっている。時折細いヒゲがピクピクと震えた。「春の夢を見ているのかもしれませんが」

タニヤザールの言葉に、姫は輝いた瞳を上げた。銀の目が優しく微笑む。

「大地の精霊は、きっと姫に感謝していますよ」

養育係が何か言いたそうだったが、口は閉じられたままだった。姫の方は、満面の笑みの所を嬉しさと痛さに微妙な表情を浮かべ、しみじみとヤマネを見つめている。

やがて、小さな溜め息について、両の手に乗る毛玉を差し出した。「元に戻しますか？」少女が不自由な首で頷いたので、タニヤザールはそれを受け取った。「では、姫君をお慰めするために……この本を差し上げましょう」

振り返った給仕長の視線が向けられたので、ラウイーザは手にした絵本を恭しく差し出した。驚いた姫が、もごもごと口を動かす。

「でも……これはタニヤザールの子どものものでしょう？」

すると給仕長は口端を上げ、軽く頷いた。

「もう二人とも大人になり、ヤマネの居場所も心得ておりますので」再び姫の顔に頼りない笑みが浮かぶ。

「私……この本が大好きです」

目を潤ませ絵本を抱きしめる姫に、タニヤザールは優雅な美しい礼をした。

「光栄です。それを描いた亡き妻も喜んでいる事でしょう」

彼女が嫁いで迎えた最初の冬に、この絵本は描かれた。生さぬ仲の子のために色筆を動かしている姿を、タニヤザールは今でもよく覚えている。丁寧に綴じられた本は、長く子ども達の愛読書であっ

たが、この数年本棚の奥にしまい込まれていた。

ヤマネを元の巢に戻し別れを告げると、彼らは姫の部屋を辞した。水場で手を洗った給仕長に手拭きを渡しながら、ラウィーザが声をかける。

「よくあそこに、ヤマネが冬眠していると分かりましたね」

タニヤザールは、丹念に手を拭いながら答えた。

「もう何年も、あそこは彼らの冬眠場所だよ。毎回、王宮周辺の見回りついでに、あちこち見つけてあるのさ」青年に手拭きを戻し、さて、と言って襟元を整える。「姫は十日は寝込む事になるから、王宮もさぞ静かになることだろう。後を頼むぞ、ラウィーザ」
給仕長の留守の間、彼が代行を務めることになっていた。

高速空中船が上昇を始め、見送りに来た国王や近習達の姿が、みるみる小さくなっていく。たちまち王宮の建物が視野に入り、厨房裏庭の使用人棟の屋根が見えてきた。その一室にリス族の一家がいる不思議を、タニヤザールは思う。

彼らの言うには、北街道へ出る支道の峠で強盗に襲われ、子どもがさらわれたとのことだった。珍しい種族は、人買いに良い値で売れるのだ。

その子がどうして王宮裏山の林にいたのか、依然大きな謎だった。姫は直前に竜の翼の音を聞いたとして、子どもを大地の精霊と信じきっている。

しかし絵本は、亡き妻の完全な創作であつた。廃れる一方のイディン法の戒めを、今一度幼い魂に教えようとしたのだとタニヤザールは聞いている。あの頃は喜捨の旬節も名ばかりとなり、多くの者が空腹のまま新年を迎えても、富んだ家々は見向きもしなかった。近年ようやく国の主導で、この習慣が蘇りつつあるのだが、それはイディン法本来の姿ではない。

誰によっても強いられない人々の自発的な行為こそが、イディンの祝福であり竜の守りであると彼女は考えていた。

そして満たされた者が揃って新年拝に集い、共に新たな祝福と竜の守りを受ける幸いを、強く心から望み願ったのだ。

「魂よ、望み願え……望み願え、魂よ」

タニヤザールの口から、『新しい竜の歌』の一節が呟かれた。

空中船が西へ進むほどに、ティムリアの都は後方へ流れて行く。

いつぱいに広がっていた青海も、間もなく見えなくなるだろう。

彼女の魂は望み願ったのだ——と、彼は思う。

そして、竜は確かにあの子を運んできたのだ。

「それに……」

呟いた喉奥がくつくつ鳴り、一旦丸められた背が激しく震え出す。と、タニヤザールは身を仰け反らせ、今まで抑えてきた大哄笑を思い切り放った。

「あの顔!!」

* * *

イディン法——喜捨の旬節についての規定

年の終わり、大つごもりが近づいた日、山や道、海から来た者が、あなたの家の扉を叩いたなら、あなたはその者にパンを与えなければならぬ。もし手元になければ、隣家に行つて借り、必ず与えなければならぬ。

そして年が改まった日には、すべてが満ち足りた者となって共に拝し、イディンの祝福と竜の守りの元に互いに笑いが満ちる。……

エリダナ・チェローミア姫の周囲は、間違いなく笑いで満ちたの

である。

$\begin{array}{r} \times 138020 \\ \hline 2517 \end{array}$

(了)

ヤマネの夢？（後書き）

姫の年末は散々でした。

しかし、これで収まるはずの無いラストバン王宮の年末年始。

イデインでは元旦に新年拝という行事がもたれます。

一年の来福を願う重要なこの時、給仕長代行が取り仕切りますが、果たして無事に行うことができるのか。

三が日を過ぎてからアップいたします。

皆様、よいお年を。

新年拝：プロローグ（前書き）

> i 3 8 3 3 9 — 2 5 1 7 <

イデインでも歳替わりは重要な節目。

新しい祝福を受けるため持たれる新年拝は、欠く事の出来ない行事です。大晦日、ラストバンの王宮でも、翌日に迫った新年拝の準備が進んでいましたが、思わぬ障害が……！？

次から次へと襲い来る難題に、敢然（？）と立ち向かう給仕長代行。

果して王宮新年拝は、無事催されるのか！？

エリダナ姫を始め、馴染みの面々が顔を揃える、ある意味オールスター。

新年拝：プロローグ

イディン法——新年拝についての規定

……国及び領地を支配する者の地では、以下の通りに行く。

東に向かう高き所を築き、夜明け前に、王（または領主またはそれに準ずる者）、祈祷師、竜騎士がこれに上る。王は支配を表す杖を持ち、竜騎士は力を表す剣を持ち、これらを立てて祈祷師の頭上で交える。これは蒼穹を表しており、二人は蒼天を表す青い衣を身に着けなければならない。また祈祷師は白い衣を身に着ける。これは暁の光をその衣に映すためである。

もし、王（または領主またはそれに準ずる者）、竜騎士がいない場合は、祈祷師がこれに替わることができる。ただし、必ず三人で高き所で暁を迎えなければならない。……

* * *

法典に目を走らせたラウィーザは、大きな溜息について分厚い本を閉じた。身も心も疲れ果て、今にも崩れそうだったが、この長い一日に付いて報告書を書かねばならなかった。昨日からの不眠不休が彼をここまで追い詰めたのではない。張りつめた緊張の中でも、長時間耐える訓練は十分に受けてきた。ただ給仕長代行の重荷は、今まで遣ったことのない神経の酷使を要求したのである。

机の上に白い紙を置き、ペンにインクを付け、再び溜息についてから事の次第を綴り始めた。

全ては、大つごもりの前日が雪であつたことから始まった。

*

*

*

新年拝：1・主（前書き）

【語句説明1】

読むのが面倒くさいと思われる方は、すぐ本文へ。

『イデイン』

この物語の架空世界。

『イデイン法』

世界を支配するイデインの大地に宿る意志の、教えと戒めが書かれた法典。人々は、これに従って生を営んでる。法を逸脱する者は、大きな呪いを発し、また受ける者となる。

『祈祷師』

呪いに陥らないよう人々を教え導き、大地に滞った呪いを解き、イデインからの祝福を伝える者。イデイン法に書かれた教えと戒めとによって、これらは為される。階級には、一級、準一級、二級、三級があるが、その中でも役職によって細かな差異がある。

新年拝：1・主

「陛下のお熱が下がらん！」

大つごもりの朝遅く、初老の執事長が血相を変えて給仕長執務室へ飛び込んできた。

「姫のおたふく風邪が感染ったようだ！」

給仕長代行のラウイーザは、驚いて立ち上がった。

「姫との接触は避けていたのではないのですか？」

「それが、我々が目を離れた隙に姫の部屋へいらしたようで……」

上の姫が隣国へ行き、下の姫とは面会謝絶となつて、子煩悩の国王はこの所、毎日が非常に寂しかった。そこへ注文していた下の姫の帽子が出来上がり、どうしても早く娘の喜ぶ顔が見たいと、家来の目を盗んで病床に忍び込んだのである。王宮では、国王だけがおたふく風邪に罹患していなかった。

浅黒い異国の顔立ちの青年は、心内で舌打ちしたものの、落ち着きを払つて言った。

「では、新年拝は王弟陛下にお願いするしかありません。お知らせ願えますか？」

「ああ……ああ、そうだったな。王弟陛下がいらつしやるのだった」
執事長は些かほつとして頷き、扉へ向かった。が、取っ手に手がかかる寸前、それが勢い良く開き、エリダナ・チエローミア姫の甲高い声が響いた。

「ラウイーザ！ ラウイーザ！ 雪です！ 雪が積まりました！
ラウイーザも見なさい！」

父王が寝込んだのと入れ違いに、この朝完全に寝台から解放された姫だった。ウサギの耳の付いた白い毛皮帽子を被ったその後ろから、隻眼の警備隊長ヴァーリックが、金盥に乗せた一抱えほどの雪人形を持って入ってくる。本来の強面が喜々としているのを見、給仕長代行は呆れて口を半開きにさせた。そんな彼を、姫の妖精のよ

うな瞳が興奮して見上げる。

「そら、お前は南の国の人間だから、雪が珍しいでしょう！」

青年は片眉を上げ、軽く首を振った。

「姫君、私はラストバンに来て十年以上になりますので、雪はもう珍しくないのです」そして、盥を抱えている警護隊長に非難の眼差しを向ける。「ヴァーリック隊長。警護隊は新年拝会場の雪掻きを行っているはずだが？」

「ええまあ、すっかり天気も晴れたので、そこは順調に進んでいます。昼過ぎまでには、予定の広さは確保できるでしょう」警護隊長は呑気な笑顔で応え、盥を上げた。「……で、これをどこに置きますかね？」

そんなものは持つてくるなと言いかけ、ラウィーザは気落ちしている少女に気付いた。小さく咳払いをし、腕を伸ばして雪景色を映している窓辺を示す。それで姫の表情はいくらか持ち直して、帽子のウサギ耳を引っ張った。

「この帽子はお父様から頂いたのです」

「良く御似合でございます」

この耳付き帽のせいで国王はおたふく風邪になったのかと思いつながら、青年はにこやかに頷いた。と、姫が言葉を継ぐ。

「そうだ、ラウィーザ。コダネってなんですか？」男達の体が硬直する。「雪掻きをしていた兵士が言っていました。お父様のコダネが無くなるかもしれないって……それは、無くなると困るのですか？」

窓際に雪人形を置いたヴァーリックは、弾かれたように立ち上がった。急いで姫を抱き抱え、では、と叫んで扉に向かい、腕の中で姫が叫ぶ。

「あ！ヴァーリック！何をします！？」

青年は固い笑みのまま、二人を見送った。

姫の教育は現在給仕長の仕事だが、給仕長代行の職務外と自身の内に確認をする。ただ引き継ぎに当たり、給仕長から受けた注意を

思い出した。

――姫には十分気を付けるように。

確かに彼女の周囲は、教育上よろしくないとは思えるものの、給仕長の言葉の真意は測りかねている。振り返った先の窓辺の雪人形には、木の実と小枝で目鼻と口が付いていた。

それから一刻も経たないうちに、再び執事長が飛び込んできた。

「王弟陛下が姫の作った落とし穴に落ちて、足を骨折なさった！」

給仕頭のセヴェリと夕食の打ち合わせをしていたラウィーザは、驚愕に目を見開いた。

「落とし穴……？ 姫君の……？」

あ、と金髪の給仕頭が声を上げる。

「それはきつと、姫君が夏に作ったものです。とても上手に出来たので、埋めてはならないと……」

「いや、そうは言っても危ないだろう！」

事実王弟が転落した。だが給仕頭は首を振った。

「いえ、埋めてはならないと書かれた看板を側に立てられて。これで嵌ればラストバナーの間抜けが分かるから、放っておくようにと給仕長が……ええ」

その看板がこの雪で倒れた。新年拝の国王代理となった王弟は、唱える祝詞を暗誦しながら新雪の庭を散策していた。直に真新しい雪上に足跡を付けることに夢中になり、落とし穴の場所を失念したのである。

これでラストバナーの間抜けが分かった訳だが、この日に限り、それだけでは済まない。

「ど、どうしたものでろう……ラウィーザ」

執事長が主人に縋る犬のような目を向けたので、給仕長代行は内心溜息をついた。本来そういうことに対処するのが執事長の仕事である。しかしここ数年、内務は給仕長に任せ切りの状態が続いており、彼の隙のない指示に従うことに慣れ切っていた。

「新年拝での王族は三親等内の血族と決められていますが、今成人の方は他にいらっしゃいません。この際仕方ありませんから、王宮付の祈禱師を代役とするしかないでしょう」

新年拝の台上に上る祈禱師は竜法院から招いているので、王宮付の二名の祈禱師達は丸々身が空いている。給仕長代行の言葉に、執事長は諦めたように頷いた。

「……そうだな。間もなく竜法院から祈禱師がおいでなさるから、そのことを伝えておこう」

「お願いします」

執事長が退出してラウイーザは眉を寄せた。新年拝で一人が欠け、祈禱師が代役を務めることはよくあることだった。だが、例年になく町の者の出席が多いと見込まれる今回だけは、できれば三人共揃ってほしかったのが本音である。

とにかく祈禱師は三人いるのだからと思いかけ、ラウイーザは強く首を振った。それは考えたくもない程に、ギリギリの場合である。だが、と懸念はあった。

今この時、新年拝のために手配している竜騎士が、王都ティムリアにいないのである。秋口から長旅に出、年末までに戻るはずであったが、十日ほど前に隣国を発ったと連絡が来たきり、今日という日が来ても何の音沙汰もない。

「……何をやっているのか、あの元締は！」

思わず独りごちた彼を、給仕頭の青年が心配そうに見守っていた。

> i 3 8 3 4 2 — 2 5 1 7 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6755x/>

新年拝：イディンにて

2012年1月4日15時50分発行